

授業から見える生徒の現状

美術の授業における
個人制作と共同制作について

都立蒲田高等学校教諭 村上

1. はじめに

学生時代を振り返って、共同制作らしいことをおこなったのは小学校6年生の図画工作の授業だ。しかし、木版画の自画像を半立体的に彫刻刀で彫り、全員分を合体して卒業共同制作として展示しただけで、実際の作業は一人ひとりの作業である。役割分担をして、相互に教えあったり相談することもなく、作業自体は一人で自己完結するものであった。それは共同制作と呼べる授業ではなかったのかもしれないし、もしかすると担任の先生は共同制作のつもりはなかったのかもしれない。そうなると実質的に共同制作の授業経験は私にはない。東京都に赴任し、初任者研修でベテランの先生の授業参観をした時の授業スタイルは「共同制作」であった。美術の授業での共同制作は評価方法や授業の進行など難しい側面が考えられ、賛否両論がでるかもしれない。しかし、「やってはいけない」訳ではない。今回、美術教育における個人制作と、授業や特別活動としておこなった共同制作の両面を振り返り、考えたことを発表する機会を戴いた。手探り状態の面もあるため、何か教育的効果を得られそうな共同制作があれば今後も探求していきたい。

2. ペーパークラフトのデザインから

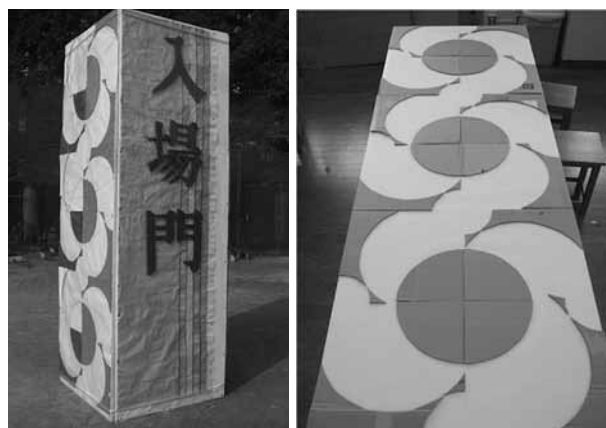
- 実施校 都立松原高校（前任校）
都立蒲田高校（現任校）
- 対象学年 第1学年
- 題材名「ペーパークラフト」6時間程度
- 学習内容
5×5cmの正方形に、直線と曲線のみで構

成したデザインを1つ考える。考えたデザインと同じものを24個、画用紙を使って作成する。全て同じデザインだが、並べ方の角度(向き)を変える事で、新たな形が生まれるように工夫する課題である。デザインした形を描いた画用紙を1つひとつ山折り、谷折りにすると半立体的になる性質を活かし、24個並べ台紙に貼って完成とした。白い画用紙で作ることで、薄く影ができ、凹凸のレリーフが出来上がる。

●生徒の反応

工作好きな生徒は能力が発揮できる題材であった。時間を充分にとれば、つくる作業が苦手な生徒も全員完成することができた。自分でデザインを創造することができるため、創意工夫する力が身に付く。

前任校では、このペーパークラフトの授業を受けた生徒のデザイン（美術部生徒の作品）を、体育祭の入場門の絵柄のデザインとして起用することにした。美術部員と文化委員会歓迎門係の生徒の共同で、特別活動として実施した。ペーパークラフトのデザインを拡大し、ダンボールを使って大型の作品を造った。製図→裁断→着色→貼り付けという単純な工程だったが、ダンボールが大きいため切る作業に手間がかかった。3ヶ月後に控える文化祭の門作りの予行演習にもなり、協力して創り上げる楽しさもあったが、いかに工夫して作るかという点では生みの苦しみも感じていたようである。



3. 浮世絵の模写（共同）

- 実施校 都立松原高校（前任校）
- 対象 平成22・23年度の第1学年
1クラス15人程度で2クラス共同
80～90名の参加
- 時間 6時間
下書き1～2時間、着色2～4時間
- 学習内容

1枚の浮世絵につき30人程度で分割し、各自担当の所を描く。パズルのようになり、着色後に並べて貼りあわせる。どこを描くかは、クジ引きで決定する。但し、絵が苦手なのに難しい所が当たってしまった場合、生徒同士の上で承の上であれば交換しても良い事とした。

●生徒の反応

- ・みんなで一つの作品を、授業の中でつくる（描く）ということに興味を持ち、完成後、全てを並べたときには感動している様子が見られた。共同制作の醍醐味を実感していたようだった。
- ・描く場所の決定は公平性を保てるクジ引きにした。1枚の浮世絵を分割する事で、場所によって難易度が変わることや、作業にかかる時間差が出るため、放課後も使って着色する生徒もいた。
- ・絵の中で隣同士になる生徒、上下になる生徒の間で、お互いの線が繋がるように工夫していた。線がずれてしまうと、仕上がりもずれが目立つので、相互に相談しあっていた。

「模写を共同制作で創る」という手法を、都内異校種の学校の先生方と協力して、それぞれの現場で実施し、共同展示会をおこなった。小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、中学校の特別な支援を受ける生徒の学級の合計5種類の異校種で巡回展を実施したあと、都内私設の美術館で合同展示をさせてもらった。



4. 浮世絵の模写（個人）

- 実施校 都立蒲田高校（現任校）
- 対象学年 第1学年
- 時間 8時間
- 学習内容

浮世絵を1つ選び、スケッチブックに模写をする。鉛筆で下書きの後、アクリルガッシュで着色。浮世絵は、グラデーション、点描、複雑な混色など学習要素が大いにあり、江戸時代の絵師の感動を追体験できるような指導を心がけた。

●生徒の反応

個人のペースで進められる。混色については質問が多かった。全体・個別指導をおこなった。この色を作るにはどの絵の具が必要なのか、色についての経験をつませる事が大切と感じた。「模写」への抵抗感、順応性の差があった。

5. 最後に

個人で制作することは、一人ひとりの個性や能力を高める手段である。作品は、個人であれ共同であれ「完成」する時の喜びは大変嬉しいものである。共同制作の場合は、制作過程を共有できるため、完成後の喜びも共有できる点は大きな達成感や教育的効果があるように思われる。特に目標達成のための活動、試行錯誤を工夫することが共同制作の醍醐味といえる。生徒の今を理解しつつ、今後も美術の教材研究を進め授業に活かしていきたい。